

### <卒論>野上彌生子「真知子」論

和田, 美由規 / ワダ, ミユキ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

161

(終了ページ / End Page)

170

(発行年 / Year)

1994-07-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019777>

# 野上彌生子「真知子」論

和田 美由規

## 前書き

『真知子』は、野上彌生子にとって、長編としても、当時（昭和初期）の社会レベルの問題を扱ったという点でも、初めての試みである。その背景には、夫豊一郎や長男素一が、真知子と同世代の悩める学生達に囲まれた環境にあったことや、作中真知子の友人として登場する大庭米子のモデルと言われる、工藤哲子という友人の存在があった。

又、『真知子』誕生の一番のきっかけとなったと言われる、宮本（当時中条）百合子の『伸子』と比較して、『真知子』が劣っているとの評価が、一般にされている。それは主人公の選ぶ結末などを比べ、真知子の、同時に彌生子の限界性を指摘したものである。

しかし、彌生子が主人公に託したものが、自分の立場を最大限に利用する「合理的かつかしこ」く生きるという自らの信条であったとしたら、更には彌生子自身、受け入れるには解決を必要とする疑

惑を孕んだ社会主義思想へ、その疑惑を打つけることを、この作品の中心意図としているとしたら、真知子を伸子と一概に照らし合わせる訳にはいかないと思う。元々伸子とは違う女性像を、彌生子は描きたかったのだと考えられるからである。

私生活でも、作家としても、理解ある夫の働きで、順調且つ利口に生き、健全な良識と社会観を培った作者が、その客観的視点から若い魂に警告を送ったのだ。

この様な視点から彌生子が書いたことを大前提に据えながら、しかし飽くまで『真知子』の作品論として、私は論じていきたい。本題に入る前に、今後話が前後することを予測して、粗筋を記しておく。

「才量のある独立の考えをもった」真知子は、社会学を学ぶにつれ、自分の属する「退屈と滑稽と陋醜に満ち」たブルジョア社会を毛嫌いする様になる。そんな折り、学友で東北の没落寸前の娘大庭米子にとり、革命社会に生きる、つまり自分とは正反対の世界の間、関三郎を知る。同時期に、意に反して強いられるブルジョアの

社交の中で、大財閥の御曹司で考古学者の河井とも知り合う。真知子は、自分の社会への嫌悪が深まるに比例して、観念でしか知らない世界を体現する関への憧れと、河井への偏見を強めていく。「プロレタリアトの問題は血の問題」と言う関は、真知子に冷酷だが、一方で河井は彼女に不意の求婚をする。「階級への拒絶」としてそれを拒んだ真知子は、遂に関に激情を訴え、彼もこれを受け入れる。しかし米子も既に関と結婚しており、妊娠までしていると思つた真知子は、彼を問い質す。社会を改善すべく動く組織の前に、個人のモラルは無意味だとする関の思想に、この時真知子は疑念を抱き、離れていく。再会した河井に、彼女は初めて彼の誠実な人格を素直に見ることが出来、彼の会社がストライキに巻き込まれている最中、河井との結婚を決意する。

## 一、山瀬について

作品中、特に鮮明なイメージを保っている人物が、真知子の次姉みね子の夫、山瀬である。その愚かしさは、見事な徹底ぶりである。その描出を渡辺澄子氏は「俗物的人物」と称しているが、正にそう呼ぶに値するのだ。

山瀬は、東北の高校で生徒主事をしながら、大学教授の座を狙っているが、真知子には井の中の蛙程度にしか評価されない。

作品中、山瀬は一貫して愚かなイメージを保っている。それは作者の意図によるものである。「そそっかしい山瀬」との形容や、ブルジョアの面々を前に、持てる知識を盛り込んで突飛なマルクス批判を唱える様子を「覚えていた暗唱が丁度当った小学生のような得

意さ」を表現したり、辛辣なまでの扱き下ろし様である。

これが野上彌生子の得意な手法なのだと言ってしまうまでもだが、それで見過ごす訳にはいかない内容を、彼の台詞は屢々含んでいるのである。

山瀬は、真知子に関と交渉を持っていることを咎めて、次のように語っている。

「一略一殊に今度の公判で、彼の名前は新たに社会の注意を引いているから、よほど慎重に行動しなけりゃ飛んでもない誤解を招き易いんですからね。一略一」

真知子の立場なら、奇麗事にしかとれないこの言葉を、「俗物」山瀬が言うのだから、読者は聞く耳を持たないであろう。しかし第三者の耳には、義妹への愛情ある義兄の忠告にも聞こえる。

河井との結婚を承諾するよう関に説得させようとする手紙も、真知子にとっては憫れみさえ湧く内容として表されているが、冷静に読めば、間違っていないばかりか真知子の結末をも暗示しているのだ。山瀬の言葉は、時に時代を象徴する世間の常識と取れる内容を含んでいるのである。その上で作者は、彼のイメージを絶対崩さない。

作者は山瀬を、単に道化として登場させているのか。そうではない。彼は無視出来ない言葉を語っているのに、その存在の愚かさゆえ、問題にされない。それを作者は狙っているのではないか。愚かさは、罪のなさを保証する。罪がないから嘲笑されても反感は持たれない。従って何を言っても許される。その様な人物の口を借りることで、読者の目をはぐらかしながら、社会批判や真知子の行く末の暗示を作者はしているのである。言うなれば山瀬は、狂言回しの

役割を担っているのである。

## 二、ブルジョアの観念

作品中、革命社会よりむしろブルジョア社会が鮮明に描かれていることを利用して、彼らの観念について考えたい。それは当時の世俗的常識と精通しており、真知子を縛りつけていた世間を理解することにもなるであろう。

まず、彼らの価値観を考えたい。その際引き合いに出し易いのが、大病院を持つ田口家の夫人で、真知子の嫂の母親にあたる倉子である。

真知子が母親と、倉子を訪問した時の会話で倉子は、「時節に応じて相当ななりや装飾を調えるのは、身分を守る上からも大切なことで、決して贅沢ではない」と言っている。革命家達、そして真知子から否定を受けるであろう自分の所業を、自ら肯定している。「お金持が、自分の腕で儲けたお金をどう使おうと、その人の自由じゃございませんか」と裏付けをして。この時倉子は、娘の富美子と知人の結婚の際、嫁入り道具に帯が百本か百五十本かで議論している。お互い譲らず、熱心に争うのだ。彼女達の価値観のもとでは、そういう問題こそが、労働者の貧困より何より、深刻なのである。

いま一つ例を挙げると、河井の会社が危機に陥ったことについての倉子らの会話である。その中で、河井の伯父の言葉が繰り返されている。「そんな馬鹿々々しいことに係り合うのはまっぴら御免だ。それよりかゴルフの方が大切な問題だ」そうである。既に身内に危険が及んでも、自分が認めないものには全くの無関心なのだ。

彼らの価値観の中で、最も重要視されるのは、では何であるのか。それは体裁である。真知子の母は、亡夫の築いた地位、そして周囲のブルジョアの生活水準に縋り付くことに必死であり、主義者関との係りを咎める。亡夫の曾ての名声、長兄の地位、更には親類縁者全てに、真知子の「無思慮な行動」が、消えない染みをつけることを恐れてである。周囲がやたら真知子に結婚を勧めるのも、その年齢、専攻する学問から、世間体を気にしてなのである。真知子はそれが堪らなく嫌なのだ。

真知子は、自分の環境が「すべての行動を、正しいか正しくないかより、世間でどう思いう噂するかに依って規定しようとする」と解説する。そして自らも、他ならぬその社会の一員であることを実感する時、嫌悪は一層色濃くなる。派手な訪問着を着た自分を鏡の中に見つけて、「こんなもの、私じゃない」と思いつながら、事実を認めるしかないのだ。

関が縮めようとしないう自分との距離も、米子との間の溝も、全て自分が属する社会に起因すると知る真知子は、足掻いても血を拭えない己れを、惨めに認識するだけなのだ。

真知子のこの思いは、河井を見る目にも影響している。作品中、彼女が河井に持つ印象は、決して芳しくない。だが彼女が河井を蔑む時、必ず根拠を階級とする。真知子の抱く印象は、彼の育った環境ゆえの先入観に支配される所が多い。彼の本質を見出だす前に、その環境を眼鏡にして、見定めてしまうのだ。

さて、ブルジョアの、特に女性の持つ観念の中でも、最も作品中多く見られ、それが真知子には又、荷厄介なのが結婚観である。周囲からの執拗な結婚話を彼女が拒み続けたのは、その観念が常につ

きまとう為である。

富美子の結婚生活とは、夫の留守中に猫の手入れ、小鳥の世話やピアノの稽古で、満足な忙しさなのだ。又、真知子の長姉辰子は、会社重役だが放蕩者の夫を持ち、満たされない思いを道楽でごまかし生活している。何れも、夫への精神的充実を持たずに、結婚生活に甘んじている。

更に倉子など、知人の結婚をこう話す。女性関係に早熟な知人の息子は、早いうち綺麗なお嫁さんをあてがえばいいと言っていた所に、丁度いい話があって纏まったと。

彼らにとって結婚相手の人間性は二の次、まずはその人の背後にある「家」が第一条件である。器量やその他は、良ければその方がいい程度なのだ。

一方真知子は、結婚や恋愛には「運命の真実な相手」とは「一瞬の瞥見でも十分足り」と、少々夢見がちだが自分の納得いく相手でない、結婚する積りのない意志を表明している。倉子達の観念に基づく結婚をする女性を見るにつけ、彼女には、「怖るべき冒険者」に思えるのである。

こういった結婚は、何もブルジョア社会にのみ見られるものではない。夫によってしか自分の居場所を見出だすことも、自分の存在を確認することも出来ない女性達は、当時は社会全体にいたのではないだろうか。

### 三、女性の幸せ

前項の結婚観と重なる部分もあるが、富美子や、真知子の次姉み

ね子に焦点を合わせて、女という性にとっての幸せを考えていきたい。

作品中、富美子はブルジョアの人間にも拘わらず、かなり好意的な視点で描かれている。それは、彼女が女性として最も幸せな道を歩んでおり、人に害を及ぼす必要がない為、毒気を持たないのである。

能の会で彼女は、「能が如何に高尚な芸術にしる、痺れで人を悩ます間は、若いものに好かれる筈はない」と意見する。誰をも傷つけない、無邪気な文句を言う。正に「無邪気」である。両親が敷いた安全なレールの上での「女性」としての人生に、疑問すら抱かない富美子ならではの無邪気さなのだ。

だから自分の結婚にも、その相手にも、素直に満足している。満足な生活を送っている限り、当人にとっては幸せである。真知子は、富美子の結婚には無論ないが、その満足を味わう無邪気さに対しては、羨望に近い感情を抱いている。

まだ確立していずとも前述のように意志的な結婚観を持つ真知子には、彼女のような結婚は到底出来ないが、疑問もなくそれが出来れば、その女性はそれで幸せを掴めるのだ。

もう一人、本当に幸せな人生を歩んでいる女性がいる。山瀬の妻で、真知子の次姉みね子である。その結婚は、誰に強制されたのではなく、恋愛の末の結婚であり、それだけでも姉や妹に見劣りするみね子にとって、幸福な運命であろう。

だが、夫山瀬とは、前に述べた通りの人物である。彼の妻なら、精神的苦痛は免れないであろうと、連想を誘う。ところがみね子は、実際幸せである。何故なら夫を尊敬し、その才能を信じており、し

かもその夫から愛されていることを確信している為である。彼女にとって山瀬の評判は、まじめで「立派な学者」である。そしてその学者の、家庭での専制に誠意をもって従うことが、夫への愛、美德であると思っているのだ。山瀬の妻であることに誇りを感じるのである。自己の人間性ではなく、夫になった男の人間性に、更にはその夫に対して如何に自分が良い妻であるかによって、彼女の幸せは測られるのだ。その課題を達成し続けることが、満足につながるのだ。

更に彼女には、今一つ「母」という名称がある。「夫の妻」そして「子の母」を全うすることで、彼女の結婚生活は満ち足りているのだ。

そんなみね子であるから、その人格は、「お人好し」である。山瀬同様、愚かな雰囲気もあるが、純真な善良さは伝わってくる。それを作者は「鈍いみね子」と表現している。だからこそ彼女は結婚によって容易に幸せを得られたのである。

逆の例として辰子の結婚を挙げると、物理的には辰子にとって非常に幸運な結婚であるにも拘わらず、不実な夫の為不幸な生活を送る。それでも辰子は夫と別れない。それが許されない社会常識を、充分知っているのだ。だからその物理的な幸運を利用して、充たされない思いをごまかしている。

辰子は前の二人に比べ、賢い女性である。不幸な結婚が、彼女を鍛えたのかも知れぬが、真知子への理解も他の女性達より深い。真知子が、望まない結婚よりは独身で働く方がいいと言うと、「これまで家の中で流していた涙を、家の外に流しに行く」だけの違いだとして、社会が如何に女性に厳しいか、真知子にさすとす。それを避

けるには「伶俐な判断」で生きるしかない。それは、何があっても夫に縋って生きていくことなのだ。一人の女性に、世間の冷たいことを知る辰子は、他のどの道より現状を保つことが、その時代を生きるには有利であると割り切っているのだ。

女性の自活が俟ならぬ時代に於て、彼女等の不幸は、夫となる男性次第なのだ。その上夫を選ぶ権利を女性は持たない。それなら、女性が幸せを得るには結婚の相手に、無条件に満足できるだけの「無知」が必要であろう。「これが当然なのだから」と思い込める無知である。「十二時の時計に促されて、胃の腑が空かなくても空いても昼の食卓に坐らされるような」状態に、素直に従える無知である。真知子はこの無知に屈服できず、自分の意志を貫きたいと願うが、作者はその姿勢にこそ、無知の必要を訴えたかったのではないか。

野上彌生子の、思想運動等への認識が観念の域に留まる為に、真知子の行動、物語の展開に甘さが見られると言われがちで、関に失望した後、河井との愛に走る部分を指摘され易いが、むしろ作者はその結末を迎えることによってこそ、その意図を伝えんとしたのだとは考えられないか。観念的であるにしろ、真知子の目指した先には茨の道の苦しみがあると知っていたからこそ、それ以外の道を指し示すことを己れの使命として、この作品を書いたのだと考えるのである。

そして何より、主人公が女性であることを、忘れてはならない。『真知子』は、『若い息子』、『迷路』と並んで三部作と呼ばれ、三作中最低の出来と評されることが多い。真知子の甘さ等、否定できない指摘も多い。しかしながら三作中女性の主人公は、真知子だけ

である。ここで述べてきた、女という性を受けた者だけが被る運命を、彼女も例にもれず持っている。夫の支配の下でのみ女性の存在が肯定される中、真知子はそんな既成の概念に捕われまいと、自分の意志に忠実であろうとしてしているのだ。関に告白する以前の彼女に、革命運動への覚悟などなかったであろうが、女性として当たり前の道を辿ることへの疑問を抱くこと自体、彼女に苦悩を呼び起こすのではないか。居心地の良さ云々ではなく、差別に目覚めた者の悲しみである。

「真知子」は女性差別の問題を扱っているのではないが、意志を貫けば難業が待つ環境で、とるべき道に悩む真知子、女性の幸せを生きる富美子やみね子を通して、その言葉が自然と思い出される。その言葉の下、辰子の「伶俐な判断で生きなければ損をする」との声が、悲哀を伴って響いてくるのだ。

彌生子は理解ある夫と、賢く生きた人である。宮本百合子という年若い友人の苦悩を、理解されなくもないが同時に、どうにかもつと女性として生き易い道はないのかと、案じたであろう。「伸子」同様、「真知子」が女性解放の文学であると論じられがちだが、富美子らの肯定的な描写を見ても、一概にその論は正しいと言えないであろう。寧ろ意志ある「才能のある」女性にこそ、女性解放の先にどんな困難が待つかを悟り、自分の様に賢い生き方を、他に見付けてほしいと願うものではないか。それは、男性社会に屈服しろというものではない。男性社会の矛盾には、敏感な神経を持つことを望んでいる。だからこそ未熟ながらも意識の目覚めた女性真知子を描き出したのだ。男のエゴを感じできる女性を、である。

関のエゴイズムは、当時流行りの「性行為は一杯の水を飲むに等

しい」とのコロンタイズムの思想が影響していると言われる。しかし流行だからと片付ける訳にはいかない。水を飲んでも何も生まれないが、性行為から妊娠という事態が生じた時、負担を免れ得ないのは女性である。米子の妊娠を知った関は「子供を持ってどうするんです。誰が育てるんです。僕にはそんな金もなけりゃ、暇もない」と吐露する。妊娠は米子の作為でもなく、彼女一人の所業でもないのに、関の口ぶりは一方的である。真知子はそれを、革命家の常識でなく男特有のエゴと認識し、「全女性の憎しみ」で詰る。周囲の女性よりずっと、男性に責任を問ひ質す真知子の姿勢は、立派である。

又、男としてというより階級的な性格におけるものだが、河井の態度にも真知子はエゴを見る。偏見も多少あるが、それを見越せせない真知子の純粹な魂を、無視すべきでない。

#### 四、真知子の甘さ

しかし真知子は、まだ観念をコントロールできず、逆に観念に支配されてしまう所がある。それが彼女の内外に混乱と矛盾を生む。その矛盾を自ら正当化してしまう点に、真知子の甘さが見られる。真知子は何を一番切実に望んだか。関や米子と共に革命に身を侷すことか。確かに彼女は自分も属するブルジョアへの嫌悪により、関らの精神的な生活への憧れを増張させる。だが彼らの生活の中心、革命運動への参加をも真知子は望んだのか。そうではない。

彼女の望みは革命家への転身ではなく、「自分を取り巻くあの堪らない生活から脱け出」すことである。それが「いつものたった一

つの願望」なのだ。

しかし、今の生活を脱け出したくとも、彼女自身行き場を知らないのも事実である。強い嫌悪を抱きながらもその環境を離れた事のない真知子は、他の環境を知り得ない。唯一自分と繋がりが保たれている社会だけは、知る手掛かりが辛じてある。関や米子の社会だ。そこそは、現在自分の居るごく醜悪な社会と相対する所である。その定義づけだけでもそこは実際以上に崇高な社会として、真知子の中で理想化されていくのだ。そして現状からの脱出と、革命社会への投身が、彼女の中でいつしか同一化されていくのである。

真知子は自分の居場所を模索する。自分が紛れもなく富美子と同類であると痛感し、しかしそれを拒み通し、米子らとの間には越える事を相手が許可しない溝を痛感する。関の血の思想が彼女をつき放す。にも拘わらず周囲は彼女を危険人物と見なす。自分の居場所はどこなのか、八方塞がりの状態に追い込まれ、関の冷酷な態度で決定的に痛めつけられた真知子の心は叫ぶ。「どこへ行けばいいのだ私は。どこへ行けば」と。行き場がとにかく欲しかったのだ。そして河井の求婚を痛く拒むことで「どんなアトラスも担いつづけることの出来ない世界に対する一決然たる離別」を執行する。行く当てがないままの離別である。この件りは、真知子の台詞が、関心の域に留まる事を指摘されがちだが、ブルジョア社会の裏に労働者の社会が存在することを認識せんとする彼女の気持ちは感じ取れる。この離別で最も傾倒する社会に、消極的だが誠実を示そうとしたのだから。そして又、河井との結婚は真知子の願いを叶えてくれるものではない。

しかし彼女は、この願望に並行して関への個人的感情を膨らませ

てしまった。観念を実行している革命家の存在は、米子からの話を聞いた時点で彼女の中に創り上げられ、「綺麗な顔」をした（富美子談）、「文学もきつと出来た」、無限の可能性を持つように見えてしまうのである。

関の言葉全てが、真知子の耳に鮮烈に響く。不公平のない組織の実現を信じるかと真知子が問えば「それを信じないのは、人類を信じないのです」と答える関は、革命を実践する者の確信に満ちている。その確信に、真知子は次第に引き込まれていく。そして自分とは異世界に生きる美青年を、英雄に仕立て上げ、憧れを抱くのである。

現状からの脱出を望む気持ちが強まるに比例して関への恋慕も募る。それは、自分の社会との対極に関の社会があり、此岸の汚点が目につく程、彼岸の存在が真知子の中でクローズアップされることに繋がる。彼岸の英雄関なら、ここから自分を救い出してくれると考えるようになるのである。

切実な願いを、愛する男の手に委ねて達成しようとする。この時点で、本人はまだ気付かないまでも真知子自身の中に混乱を招くことになる。彼女の中で、願いと恋愛が同義語となってしまう、その愛と関の思想への信仰が混同されてしまったのだ。それにより、彼女の願望は関らの思想への賛同に、照準を定めるのである。行く当てを失った真知子の心が、行く先を創り出す事で満足したのだ。それは、結婚によって自分の住む世界が決定されると考える真知子には、必然的な意味を持ち、混同も免れ得ないのである。

つまり、今の環境からの脱出は結婚によってのみ実現されると真知子は信じ、相反する社会の人間こそそれを達し得、その完全体、



関を愛したということである。関への激白の際彼女ははっきり言っている。「今の生活から私を救い出してくれるのはあなただ」と。更に関が真知子の思いを受け入れたことは彼女にとって、「牢獄を脱け出た一囚人の満足」なのだ。関との結婚にしか脱出の手段を見出だせない点に、真知子の甘さを確かに見ることは出来る。飽くまでこの時点での話だが。この後関との訣別から、真知子に少しずつ変化が起きる。それを見越して作者はあえて真知子の甘さも描いたのだ。従って真知子の甘さイコール彌生子の限界性との論は、早まりであろう。寧ろ真知子の甘さを露わにすることで、この様な境遇のお嬢さんが、その程度（脱出が目的）の動機で革命に飛び込むには道はあまりに険しいのだ。それを反面教師的に論していると考えられる。現状からの脱出の延長に運動への投身を置く様な覚悟では、余りに頼りないということである。

真知子はあれ程信じた関の思想を、否定する様になる。彼女の變化の始まりである。

米子と関の関係を知り、関との結婚を思い留まった真知子に関しては言う。恋愛は個人レベルの問題にすぎず、個人の精神の苦痛は理想の組織を実現する上では私事にすぎないのだと。それに真知子は納得しない。心を病んだ人間がいるまま構成された社会なら、生命は維持できても健全な社会ではないと考える為だ。それを関は観念論だと揶揄するが、これが真知子、そして彌生子には社会主義への拭い去れない疑念なのである。彌生子は、周囲の囂う社会主義が、人間の命を保証するとの考えには賛同するが、それによって精神や感情が犠牲になるなら、個々の真の幸福は得られず、真に幸福でない個人の集合体なら、社会も幸福にはなり得ないと考え、それ故社

会主義に心から賛同出来なかった。

その疑念が昨今では現実となり始めた。その最たるものが、ソビエト崩壊である。社会主義の実現した国として真知子も関心を寄せているが、その国が社会主義に挫折したのだ。幾ら働いても必要以上に豊かにはならず、国を豊かにしても直接自身を満たさない現実の組織が今、続々と崩壊しているのだ。個人のモラルを無視する社会の完全でないことを、察知していた彌生子は、これを予感していたのだ。又、彼女自身自論が観念論であることを自覚している。真知子の口を借りてそれを説明している。

ロシアへの興味を真知子は「話を聞いただけや、書物を読んだだけでは承知出来ないのです。自分でたしかめた上でなければ」と語る。これは作者の思いと重なる。そして「一人残らず仕合せになる善の理論」を「どうかして信じたい」という真知子の思いは、作者の社会主義への前向きな願いでもあるのだ。

彌生子の疑念は、終盤真知子が米子に「あの考え方の下で、人間がめいめいの意欲をどう精算して行けるか」と語ることで明確になり、これこそが現代の社会主義が乗り越えられなかった問題なのである。

こういった社会主義の結末を見ると、真知子の甘かった思想への認識も、意義のあるものとなるのではないだろうか。

## 五、彌生子の失敗

しかし彌生子も、作品中幾つかの失敗を犯している。まず渡辺澄子氏の指摘通り、ブルジョアの間達に比べ、重要視されるべき関

らの人物とその社会の造形は確かに弱い。彼らの生活の核をなす苦の社会の説明は、作者の知識内での描写である分インパクトを欠く。その為真知子がその社会のどこに惹かれるのか見えづらい。しかし彌生子自身、革命への理解が観念の域に留まることを自覚していることは既に述べた。更には彼女が関らを登場させたのは、自身の社会主義への疑念を伝えるという目的の為ではないか。その疑念を有利に表現する為彼らを描いたと考えると、その生活の実態を描き出す必然性は感じられなかったとも考えられる。

次に、関との結婚までの二日の間に、真知子が辰子に金を借りに行く場面は、忌み嫌う社会の人間から資金調達するとは、やはり理解し難いが、辰子を訪ねる行為は、真知子が今捨てんとしている社会の女性の不幸を、改めて強調する上の適役を登場させる意味で、必然性がある。

そして作品中彌生子が最大の失敗を犯したとすれば、それは関を社会主義思想の体現者としてしまった事である。関個人の思想が主義者全般の思想として扱われる為、真知子の、関の否定は、社会主義思想全ての否定に繋がる。これは、信じられるなら信じたいと望む作者の意志に反している。しかし真知子が自己の観念を確立する上で、この否定は大きなステップになった事は間違いない。

## 六、河井へ走る結末

視点を真知子へ戻す。彼女は現状を脱け出したかった。そしてその願いを関に託したが関との結婚に敗れ、同時に社会主義思想に挫折した。そして彼女に深い理解を示す、財産を失った河井との結婚

を決意して物語は終わる。真知子が河井に走ったことには「橋の手前で引き返す」(渡辺氏)等の解釈がされているが果たして、彼女は元の社会に戻る積りで河井へ走ったのか。そうではない。何故なら作者が彼女に託したのは、最も自分に適した道を見付けてほしいとの思いだからである。自分の持ち場を見出させと説いているのだ。真知子は、関らの思想に疑念を抱いてから、その考えを変化させていく。河井との結婚も、この変化があればこそであった。理想の社会の実現は望みながらも、疑念は拭いきれず、しかし現状の社会の機構を持つ問題も認識する真知子は、関が不可能とした「中間に生きる」道を選ぶのだ。社会主義ではなく、自分なりの生き方の思想を、形にせんとしているのである。そこには社会の流れを己れの立場で誠実に受けとめようとする河井も、やはり立っていると気付いた故に真知子は、彼を第三の道の同伴者を選んだのだ。その人生は富美子のものとは違う。押し寄せる時流に、出来得る形で対応しようとする意志が二人にある限り、ブルジョアと一緒に決してない。更には、真知子の思想の成長は、河井とのこの後の人生でも続く。従って真知子の物語は、これで完結はしないのである。

## 後書き

最後に、私がこの論文の中で綴ってきたことは、全てこの、野上彌生子自身の書による文から広がった発想である故、抜粋して掲載しておく。これは、『真知子』の岩波文庫版の『まへがき』である。

しかし私生活における箇人的モラルの完成―それは容易でない

にしろ、常にそれに達しようとする慎ましい精進なしには、左翼運動の目標とされる働く者の階級の幸福も、もっと広く地上の人類の新しいモラルの昇華もありえないとする女主人公の考へ方は、作者の考へ方であることだけは明らかにしておきたい。

偉大な輝かしい仕事のまへには、ほんの些やかな私事と見なされるのが、結局重大な影響をそれに与へないかを危ぶんだ私の疑惑が、彼女の最初の愛の対象にも投げかけられている。

#### 参考文献

- 『野上彌生子の世界』瀬沼茂樹 岩波書店  
『野上彌生子と大正期教養派』助川徳是 桜楓社  
『野上彌生子研究』渡辺澄子 八木書店  
『野上彌生子の文学』渡辺澄子 桜楓社  
『野上彌生子全集第七巻』瀬沼茂樹編 岩波書店  
『現代日本文学大系36』谷川徹三解説 筑摩書房

(わだ みゆき・一九九四年卒・長谷川ゼミ)

### 「そとぼり通信」 No.30 原稿募集

「そとぼり通信」は、会員諸姉の親睦交流、情報交換の場です。お気軽にご投稿ください。No.30の発行は卒業期と重なりますので、法政の思い出、卒業のこと、近況報告などお寄せください。むろんテーマはこれに限りません。エッセイ二〜三枚(四百字詰)を原則とします。締切、12月13日(火)。送り先、法政大学国文学会事務局。